

研究ノート

学校現場における生徒指導能力の育成に向けて

— アンケート調査から見えてきたもの —

田辺 大藏¹⁾

キーワード：教職課程、生徒指導、自己指導能力、自己実現

1. 問題の所在と目的

平成22年に文部科学省から発行された『生徒指導提要』によると、生徒指導とは、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のこと」だと定義されている。そして、積極的な意義として、「児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」ことがあげられている。さらには、そのねらいとして、「自己指導能力や自己実現のための態度や能力の育成」があげられ、その自己実現の基礎に、「日常の学校生活の場面における様々な自己選択や自己決定」が位置づけられている。そしてこれらは、「学習指導の場を含む、学校生活のあらゆる場や機会」において、また、「授業や休み時間、放課後、部活動や地域における体験活動の場」においてなされると続く。

しかし、教職を目指す学生たちと接していると、生徒指導をそのようには認識していないのではないかという気持ちにさせられることがある。つまり、ルールやマナー等の遵守の指導や、問題行動への対応や特別指導こそが生徒指導だと、本学の教職課程を履修している学生たちでさえ、共通に理解しているのである。

本来、「自己選択や自己決定」の機会を与えていたはずの各学校は、『生徒指導提要』にのっとり、「現在及び将来の自己実現を図っていくための自己指導能力の育成」を目指すものとして掲げ、児童生徒を指導してきたはずである。そうであるならば、教職課程を履修している本学の学生たちも、「学習指導の場を含む、学校生活のあらゆる場や機会」において、また、「授業や休み時間、放課後、部活動や地域における体験活動の場」において、学校での生活全体で取り組んできたはずである。それも、小・中学校の義務教育9年間、さらに高等学校まで含めると、計12年間の長きにわたって、それらの生徒指導を継続的に体験してきたはずなのである。

これは、学校現場においては、『生徒指導提要』のいう生徒指導が実際はなされていないのか、または、なされてはいるものの、生徒たちの認識の範囲がそこまで及ばず、ルールやマナーの遵守の指導や特別指導のみを生徒指導だと誤って認識しているのかのどちらかであろう。それ故、その原因を探ることは、「生徒指導論」の講義を進めるうえで、今後の方

¹⁾ 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

向性を示すことにもなるだろうと考えた。そこで、「生徒指導論」の受講者全員を対象にアンケート調査を行い、検証することとしたのである。

2. 手法と対象

2.1 調査対象と調査内容

本学での実態を把握するために、教職課程を履修している学生のうち、3～4年生15名を対象として、2020年7月に13の質問からなるアンケート調査を実施した。なお、回答者の属性に関しては、学部学科、性別、取得希望免許の教科を求めた。取得希望免許の内訳は、国語33%、英語20%、公民7%、養護40%であった。また、性別として、1名の男子学生以外はすべて女子学生であった。

上記の学生たちを対象に、オンライン授業で用いているマイクロソフト社のTeamsを通じて、質問紙と回答用紙である調査票を配信し、選択式（一部記述を含む）により、回答を求めた。おもな質問項目は、教職への志望動機、教職に対する認識、教職課程への要望、教員採用試験の受験予定の詳細、小・中学校、高等学校での生徒指導の具体的内容、受講前の生徒指導観、そして受講後の生徒指導観等とした。

2.2 調査対象者の実態把握

本研究は、学校現場における生徒指導の実態と、学生の生徒指導に対する認知との溝は、どうして生じるのかという原因究明にあるが、副産物として、教職に対する学生の意識の一端も知ることができた。特に、今後の教職課程の在り方を模索している者にとっては、方向性を考える際の貴重な資料となると思われるので、まずここに記しておく。

教職課程に登録した動機を選択式（複数回答）で求めた。「資格に有利だと思ったから」が最も高く、全体の67%であった。ついで「以前から教員になりたかったから」47%と、約半数の学生が教職を将来の職業と考えていることがうかがえた。事実、別の質問項目で「教職に就くことは考えていない」と回答した学生は27%であったことから、目標をもって入学し、着実にその希望に添うよう努力している姿が浮き彫りになった。なかでも全体の40%の学生が、「在学中に教員採用試験を受験し、合格したい」という思いを抱いていることは、頼もしい限りである。

まず、その志望のきっかけとしては、「以前から教員になりたかったから」47%、「小・中高校時代の尊敬する教師のようになりたいから」33%、「親や恩師などから勧められたから」27%と、身近な人の存在が大きく影響を与えていたことが分かった。

その一方で、「なんとなく履修したいと思ったから」はほとんどおらず、15人中1人であったが、この学生は他の項目2か所にも重複して回答していることから、まったくの「なんとなく履修」ということには当たらない。

以上のことから、教職課程で学ぶ学生は、身近な人の影響により、早い段階から、自らの将来の具体的姿を描き、途中であまりぶれることなく、自らの描くその像に向かって邁進していく姿が浮き彫りとなった。

その一方で、教職を目指すことを不安に感じている様子も明らかになった。その不安は大きく二つに分類できる。一つ目は、教育実習に関する不安である。これには、「教育実習に出ることが不安である」60%という実習そのものへの不安とともに、「就職活動と教育実習

が重ならないか不安である」27%という付随して出てくる影響への不安にまとめられる。前者は、教育実習に赴く前に、「教育実習指導」を事前に履修受講するので、ある程度解消するはずである。しかし後者は、コロナ禍に各企業がどのように動くかは未知数であり、場合によっては本年以上に流動的となる可能性もあり、もはや予測すらできないために、今後ますますこの不安が高まる可能性がある。

二つ目は、教員採用試験に向けての不安である。全体の3分の2以上の学生が教職に就くことを真剣に考えているのだから当然の不安である。これは学生自身の問題であるので、より深く、不安材料は何なのかを問うてみた。すると、「受験対策についての十分な知識がない」73%、「教員採用試験の受験に自信がない」60%、「受験勉強を始めていないが間に合うか不安だ」47%と、本気で志望はしているものの、具体的な動きができていないことをうかがわせる回答が目立った。そのことがよりはっきりと見えるのは、「教職に関する情報がほしい」60%、「教員採用試験の対策を充実してほしい」53%からも明らかであろう。

つまり、学生たちは早くから教職に就くことを考え、それに向けて目の前の履修や勉強を進めてはいるものの、さらにその先にある採用試験に向けて自ら計画を立てたり、対策を立てたりするわけでもなく、時が過ぎるにしたがって不安が増してきているというのが現実の姿であろうことが推測される。

3. 結果と考察

3.1 意識の変化について

まず、「生徒指導論」受講前の段階において受講集団内で、共通して生徒指導と認識している事項を洗い出してみた。多い順に、「① 校則違反の指導 (服装、頭髪)」87%、「④ 問題行動の指導 (いじめを行っている場合等)」80%、「② 社会的マナーの指導 (服装、規則、挨拶等)」73%であった。

今回のアンケート調査は、8項目の具体的指導のうち、該当すると思われるものすべてを答える形式 (複数回答可) で回答を求めた。その総回答数に着目すると、受講前は、のべ55の回答数があったので、一人あたり8項目中3.6項目に該当すると回答していたことが分かる。このことから、この3項目にいかに集中して答えているかが分かる。

さらに、「③ 学校生活を円滑にするための指導 (授業態度、時間の厳守等)」47%、「⑤ 進路に関する指導」33%、「⑥ 集団生活に関する指導」33%と続く。また、自由記述による回答においても、「悪いことをしたときに指導されるもの」、「頭髪指導などのことである」、「制服や頭髪の検査のイメージ」などという言葉が散見された。

その一方で、「⑦ 自己実現を図るための指導」や「⑧ 自己選択や自己決定の場の指導」を、生徒指導と認識できていた学生はわずか一人であった。しかし、この学生がなぜ、「ある」に回答したかということを経後に直接確認したところによると、昨年度の教職科目の授業において、上記内容を学習した経験があったことが判明した。よって、児童生徒の段階で意識していたものではなかったということであった。そのことにより、児童生徒としては、受講者全員が、「⑦ 自己実現を図るための指導」や「⑧ 自己選択や自己決定の場の指導」は生徒指導ではないと認識していたことが明らかになった。

次に、「生徒指導論」受講の前後でどのような変化が現れたかを探ることとした。まず、集団全体として、生徒指導の認識範囲の変化に注目した。前述のごとく、「生徒指導論」受

講前は、のべ55の回答数があり、一人あたり8項目中3.6項目が該当すると回答していたが、「生徒指導論」受講後は、のべ79の回答数となり、1.4倍以上の回答数となった。一人あたりの回答数も約5.3項目以上に該当すると回答したことになる。これは「生徒指導論」受講によって、個人内における生徒指導の認識範囲が、ほぼ共通して受講集団の中で拡大したことを意味する。

また、「生徒指導論」受講の前後で、各項目の認識度の変化に着目した。まず「生徒指導論」受講前よりも「生徒指導論」受講後の方が減少した項目を、減少幅の大きい方から述べると、まず「① 校則違反の指導（服装、頭髪）」87%が60%へと27ポイントの減少、次に「② 社会的マナーの指導（礼儀、規則、挨拶等）」73%が60%へと13ポイントの減少、そして、「④ 問題行動の指導（いじめを行っている場合等）」80%が73%へと7ポイントの減少となった。しかし、この3項目の減少率は大きかったものの、それでもなお、全体の60%の学生が生徒指導にあたりと認識していた。そこで、「生徒指導論」の受講前と受講後に、生徒指導が具体的にどのような指導だと認識していたかについての割合をまとめ、表1として示す。

表1 生徒指導はどのような指導か

項 目	受講前	受講後	増減
① 校則違反の指導（服装、頭髪）	87	60	27▲
② 社会的マナーの指導（礼儀、規則、挨拶等）	73	60	13▲
③ 学校生活を円滑にするための指導 （授業態度、時間の厳守等）	47	60	13
④ 問題行動の指導（いじめを行っている場合等）	80	73	7▲
⑤ 進路に関する指導	33	40	7
⑥ 集団生活に関する指導	33	67	34
⑦ 自己実現を図るための指導	7	87	80
⑧ 自己選択や自己決定の場の指導	7	80	73 (%)

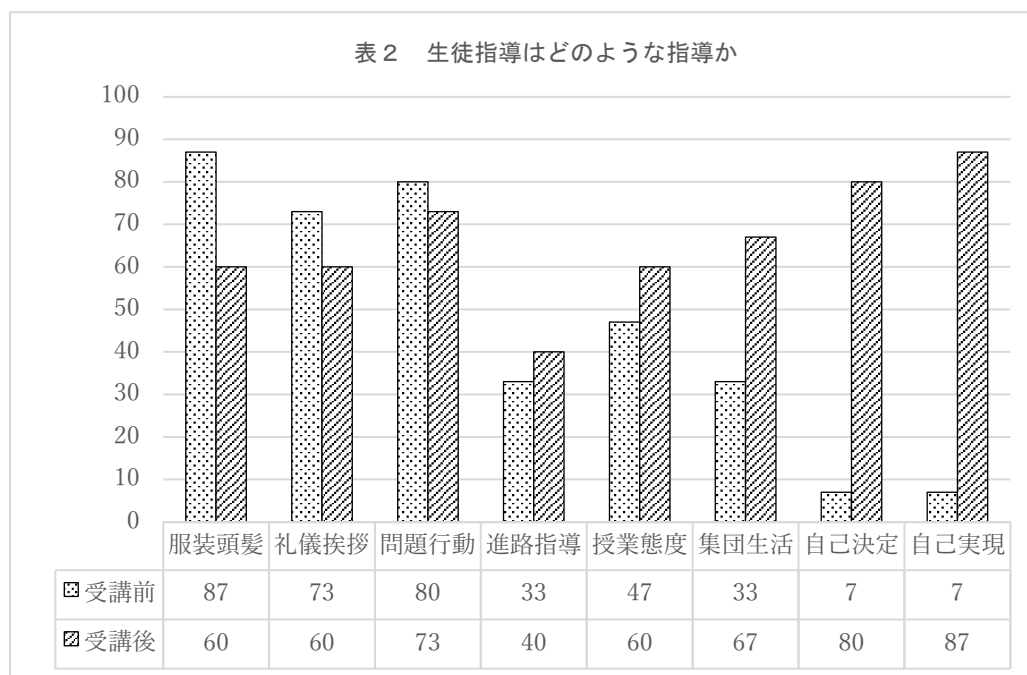
その一方で、前述の①、②、④以外の項目はいずれも、「生徒指導論」受講後にポイントを伸ばしていた。具体的な項目別に見ると、「⑥ 集団生活に関する指導」33%が67%へと、34ポイントの倍増と大きな伸びを示した。また、「③ 学校生活を円滑にするための指導（授業態度、時間の厳守等）」47%が60%へと13ポイントの上昇、さらに、「⑤ 進路に関する指導」33%が40%へと7ポイントの上昇を示した。

中でも特筆に値するものとしては、「⑦ 自己実現を図るための指導」で、受講前には7%であったものが、受講後は87%まで伸ばし、80ポイントも上昇した。また、「⑧ 自己選択や自己決定の場の指導」は受講前に7%であったものが、受講後は80%まで伸ばし、73ポイントの上昇となり、この2項目に関しては、受講の前後で大きく意識が変わったことがうかがえた。この両者に共通する受講前の7%の学生は、先に触れた、昨年度の教職科目の授業での学習経験者である。よって、この2項目に関しては、児童生徒の段階では誰一人として生徒指導とは認識していなかったことが分かる。

記述回答においても、「授業内でも（生徒指導が）行われていることなどを知った」や「生

徒指導は自己指導力をつけることが一番の目的であることが衝撃的だった」などの表現からも、経験から知っていた生徒指導と、実際にあるべき生徒指導との溝は大きく、乖離していたことがうかがえる結果であった。

「生徒指導論」受講の前後での変化の増減率の順に、項目を並べ替え、グラフにしたものが次の表2である。



3.2 生徒指導内容について

前述の記述回答のように、衝撃をもって「あるべき姿」を知ったということは、小・中学校、高等学校時代に学生たちは、どのような指導を受けてきたのであろうか。各指導項目を具体的に示し、指導を受けた経験の有無を小学校、中学校、高等学校の別で問うた。ただ、設問の仕方が悪く、「今までにどのような生徒指導を受けましたか」と問い、学校種ごとにその有無を回答するようにしてしまった。このことは、その指導項目の中に個別の特別指導等も含まれていたため、「それを（個人的には）受けてはいない」「特別指導を受けた経験はない」という意味で回答した学生を若干ではあるが含む結果となってしまった。本来、このアンケート調査は、広く学校現場で行われていたか否かを調査することをこの項目で明らかにしたかったので、直接・間接に（経験として）指導を受けたり、または指導されている状況を見聞きしたりすることを含めるような問いかけをすべきであった。

今あるデータをもとにまとめると、小学校では、最も多かったのが「⑤ 友だちづきあい」87%で、次に「④ 挨拶、言葉遣い」、「③ 校内ルール」、「⑥ 交通マナー」、「⑦ 休みの過ごし方」の4項目がともに73%と、人間関係構築と基本的な生活習慣を含む社会化にウエイトを置いていることが分かった。それが中学校になると、ほとんどの項目において、6割以上の学生が経験を有していることが分かった。それらを含む各具体的指導項目について、小学校（小）、中学校（中）、高等学校（高）別での指導を受けた経験の有無の割合を次の表

3に示す。

表3 学校種別に受けた具体的生徒指導内容

項 目	小	中	高	なし
① 服装	33	80	87	0
② 頭髪	20	80	67	7
③ 校内ルール（マナー・時間）	73	80	73	7
④ 挨拶、言葉遣い	73	87	73	7
⑤ 友だちづきあい（含いじめ指導）	87	80	53	0
⑥ 登下校時の交通マナー	73	80	60	13
⑦ 休みの過ごし方	73	53	47	20
⑧ 学習方法	60	80	67	7
⑨ 進路指導	13	87	87	0
⑩ 校則違反（服装・頭髪以外）	20	60	53	20
⑪ 学外トラブル	13	40	20	53
⑫ その他	0	7	0	87 (%)

3.3 自己指導能力の育成について

次に、「将来の自己実現を図るための自己指導能力を育成するような指導を受けたか」を問うてみた。具体的指導項目を設定し、小学校（小）、中学校（中）、高等学校（高）の各学校種別での被指導経験の有無を確認した。回答者の割合は次の表4に示す。

表4 自己指導能力を育成する指導を受けたか

項 目	小	中	高	なし
① 指導は受けていない	27	33	40	
② 覚えていない	27	0	0	
③ 進路指導（将来の夢）	40	80	87	0
④ テストの自己評価	27	73	67	7
⑤ 社会のマナー	60	87	87	0
⑥ 休みの計画表	67	67	40	7
⑦ テストの計画表	13	80	67	7 (%)

表1「⑦ 自己実現を図るための指導」については前述のごとく、小・中学校、高等学校のどの学校種においても指導を受けた経験はなかった。ここでの質問項目においては、「① 指導は受けていない」「② 覚えていない」と回答した学生が、小学校では27%、中学校では33%、高等学校では40%と一定の割合で存在した。そこで、個別に詳細を検討してみた。すると、小学校時代について「② 覚えていない」と回答した学生1人（前述の1人とは異なる）は、他のどの項目も指導を受けた経験はないと回答しているので、整合性はとれるものの、それ以外の学生は、実際には表3のうちの③から⑦のいずれかの指導を、小・中学校、高等学校の段階で経験していたのである。つまり、「① 指導は受けていない」と回答しつ

つ、③から⑦の指導を受けた経験があるということは、その学生たちにとっての③から⑦は、表1の「⑦ 自己実現を図るための指導」という認識ではないことも示している。つまり、3～4割の学生にとっては、「自己実現を図るための指導」とはどのようなものなのかという、具体的な視点がないことが結果的に浮き彫りになってしまった。これは、表1の「⑦ 自己実現を図るための指導」で、「生徒指導論」の受講前には7%であったものが、その受講後は87%まで伸ばし、生徒指導とは、「自己実現を図るための指導」であると理解できたにもかかわらず、抽象的な概念のみの理解にとどまっており、学生には学校現場という臨床的な視点がないことを示すことにもなった。

3.4 自己選択、自己決定の場や機会の指導について

最後に、「自己選択や自己決定の場や機会を与えられたか」という質問項目であるが、小学校段階で「② 覚えていない」と回答した学生が、また、高等学校段階で「① 場や機会はなかった」と回答した学生が、それぞれ20%いたが、学生たちが過ごした学校現場で、行われていなかったというわけではなかった。それは、詳細にアンケート用紙を分析すると、それぞれの20%の学生も表4のうち、③から⑮のいずれかの指導を、小・中学校、高等学校の段階で経験していたのである。つまり、「① 場や機会はなかった」と回答しつつ、③から⑮の指導を受けた経験があるということは、その学生たちにとっての③から⑮は、表1の「⑧ 自己選択や自己決定の場の指導」という認識ではないことを示している。つまり、これも、前問と同様、「自己選択や自己決定の場の指導」とはどのようなものなのかという、具体的な視点がないことが明らかになったということであろう。

実際、小学校においては、係や委員会、部活動、学校行事等でそういう場を設けられていたり、中学、高等学校においては選択授業や進路選択等、学習面で自己を分析し、自己決定をさせる機会が設けられていたりするが、これらの指導が自己選択や自己決定の場の指導だということが理解できてはいなかったということの意味する。

具体的指導項目を設定し、小学校(小)、中学校(中)、高等学校(高)の各学校種別での被指導経験の有無を確認した。回答者の割合は次の表5に示す。

表5 自己選択や自己決定の場や機会を与えられたか

項目	小	中	高	なし
① 場や機会はなかった	7	7	20	
② 覚えていない	20	0	0	
③ 習熟度別クラス選択	13	33	53	20
④ 選択授業	0	20	80	7
⑤ 進路選択	0	60	93	0
⑥ コース(文系・理系等)	0	0	60	33
⑦ 委員会	80	80	80	7
⑧ 係	80	73	73	0
⑨ クラブ・部活動	73	87	87	0
⑩ 学校行事	80	87	80	0
⑪ 職場体験	33	73	33	7

⑫ 班の決定	67	73	37	7	
⑬ 上級学校体験	13	13	20	67	
⑭ 生徒会選挙	20	87	87	0	
⑮ 修学旅行の予定	60	67	53	0	(%)

4. 成果と課題

4.1 調査結果の考察

これらの結果から、実際の学校現場で、様々な生徒指導上の取り組みがなされてはいることも明らかになったが、指導を受ける側の児童生徒たちには、特別指導（ルール違反やマナー違反等）に関わる問題にどうしても目がいくことも明らかになった。

中でも中学生時代の実体験が大きいことも分かった。これは、学校教育法施行規則第七〇条「中学校には、生徒指導主事を置くものとする。」に定められることにより、小学校にはない生徒指導上の法令主任が配置され、生徒はそれまで生活をしてきた小学校とは大きな違いを感じ取っていたからなのかもしれない。

また、生徒の発達段階からみても、思春期、反抗期といった、心も体も大きく変化をする時期でもあることから、風紀上の問題や法令遵守の問題が大きな壁として生徒たちの前に立ちはだかつて見えたのかもしれない。

さらに、「将来の自己実現を図るための指導」や、「自己選択や自己決定の場の機会の指導」は、生徒指導主事を置かない小学校においても、学生たちは当然のこととして経験しているため、改めてそれが生徒指導の範疇だと認識することもなく、中学校、高等学校と進んだことによるのかもしれない。今後はさらに、その原因を究明していかなくてはならないと感じている。

各学校種での具体的な指導項目について、その体験、経験を掘り下げて確認すると、各学校種においては「将来の自己実現を図るための指導」も、「自己選択や自己決定の場の機会の指導」もきちんとなされていて、学生たちに指導を受ける側としての認識がなかったことが読み取れた。つまり、生徒指導の定義や原理を押さえ切れていないことからくる印象の先走りであることがうかがえた。実際、「生徒指導論」を受講した後の感想として、「学校や先生側には生徒のことを考えた様々な狙いがあったということを知り、知ることができた」等と記述する生徒が多数いた。

4.2 課題

アンケート結果の分析を終え、次年度からの「生徒指導論」の展開に関して、その取り組みの方向性を得ることができた。

まず、将来的に教職に就こうという、高い意識をもっている学生たちでさえ、生徒指導の認識範囲を、ルールやマナーの遵守の指導や特別指導のみと誤って認識していた。この誤った認識から解放するために、「生徒指導論」の初期の段階で、生徒指導の定義や原理をより丁寧に押さえることが最も大切であることが明確になった。その上で、多くの学生が生徒指導とは認識していなかった、日々の生徒指導の在り方や、「将来の自己実現を図るための指導」、「自己選択や自己決定の場の機会の指導」を押さえるとともに、個別の課題を抱える個々の生徒への指導の進め方等の、実践的な生徒指導を学ぶ必要があることも明らかにな

った。

次に、「将来の自己実現を図るための指導」や「自己選択や自己決定の場の機会の指導」の具体的な学校現場での取り組み事例等についても言及する必要があることが分かった。知識や言葉、概念のみが肥大化し、実践的な現場で役立つ教育活動や指導にまでは至っていなかったからである。理論や原理等を抑えることも重要であるが、こと教職に関しては、現場での臨床的観点も忘れてはならない。

最後に、課題として抑えるべきことは、学生たちが、教職に関しては大いに意識をもち、免許取得後はそれを生かしたいとは思っているものの、具体的手立てや対策を自ら進んで行うところまでは至っていないということである。今年度の「生徒指導論」を中心とした授業では、とりあえず第一歩を踏み出すようアドバイスをしているが、課外の活動としての具体的な対策講座等の開講が学生たちには必要であるのだろう。教職に関する情報提供の場、情報共有の場として動き始め、組織的・計画的・継続的な学習の場を準備していかなければならないと感じている。

しかしこれとて、コロナ禍においての実施であるので、オンラインで行わなければならない、実施には工夫が必要となってくる。

そこで、今年度は9月1日からではあるが、自主課外活動「教員採用試験対策講座」と称し、動き始めることとした。実施要項（基本方針、全体概要、開催日程等/A4版6頁）を作成し、主に前期「生徒指導論」受講者に周知し、募集をかけたことのみを記しておく。具体的な実施方法や結果については、また別途、まとめるつもりである。

参考文献

- 高柳真人 (1998) 「大学生による「生徒指導」の記憶と評価について」『研究紀要』筑波大学附属坂戸高等学校
- 文部科学省 (2010) 『生徒指導提要』教育図書
- 伊藤敦美 (2012) 「教職志望学生の生徒指導に関する意識」『人文社会科学研究年報』敬和学園大学
- 高橋優・田中正一 (2017) 「教職課程登録者の意識と適応: 教職課程意識調査 (平成 26-28 年度) より」『埼玉工業大学教養紀要』埼玉工業大学基礎教育センター工学部会
- 今崎浩 (2018) 「教職を目指す学生の生徒指導についての認識 ～学生の生徒指導体験に関するアンケート調査から～」『広島文教女子大学教職センター年報』広島文教女子大学